

【重松】(自我について)自我が一瞬なくなる、あるいは自我があまりすぎではじゃ
てしまう「暴力」に惹かれたらどうしようとは思いませんか?

【いとう】惹かれるというべきなのか、事件をニュースで見ている、暴力性の生起
する事態を他人事として評論してはいけないといつも思っています。「俺もいき
なり子供を殴り殺すのでは?」と、自分のなかの暴力性に置き換えてる。とい
うか、事実にいきなり殴り殺しそうな自分は確実にいる。だからかえって、近頃の
小説にやたらと暴力が出てくるのはいやですね。安易だから。

【重松】いとうさんの抱く暴力衝動って、自我が暴発するのか、それともなくなった
ところに入ってくるのか、どっちなんだろう?

【いとう】無意識の方が大きい。いま、無意識に、自分を明け渡そうとしている気が
してます。昔は、超自我が強くて、自我が小さかったんだけど、いまは無意識を
どうにか引っぱり上げて生命力を入れようとしてるせいで、自我が小さくなって。
それも自分のためにというより、世間の大きな無意識がどうなるかを、自分
でカナリアになって体験している感じです。なかなかわからないもんですが。

【重松】そのカナリア、すごく孤独なんだよね(笑)。

【いとう】え、そうなの?(笑)

【重松】だって、それこそ湾岸戦争の記憶もぜんぶ含めて、いまの状況を見てみ
ると、「自我 OK」というのが現状でしょう。

【いとう】そう、OKなの。暑苦しいよね、いま。
【重松】それだと、文学の定義がわかってるいとうさんと、わかっていない有象
無象の人たちが、また異趣同歩しているようなもんですよ。たとえば、いとうさ
んのサイト「Watch SEIKO」はずっと更新してないでしょ? 98~99年ご
ろが、いとうさんは版權放棄も含め、ハイパーテキストを作ろうとしたと思う。どこ
ろが、田口ランティさんらが出てきて、メールマガジンがネットの主流になって
いく。普通のテキストベースというか、メッセージというか、もっといえば自我を
押しつけるのが主眼になるわけです。「わたしの詩集買いませんか」がたんに簡単に
できるだけになった。おそらくメルマガやブログによって、ネットの一方の可能
性がネグられたんですよ。

【いとう】いま、結局は私小説しかないね。
【重松】糸井さんの「ほほ日」も、通販 WEB がおそらく経済的にも支えている
と思います。フラッシュで動画はいくらでも入るけど、本当の意味でのハイパー
テキストの楽しみ方は見出せないでしょう。
【いとう】でも僕、ひとに隠れてブログやってんだ(笑)。

【重松】え、そうなんですか!?

【いとう】でも、なにもリンクしてないから、見つけたひとだけが寄ってきてる(笑)。
そこでも最初はブログの文体とは、ってことばかり書いてました。形式が気に
なるんだよ、どうしても、この頃はただ反射的に書いてますけど。

【重松】新しいメディアには新しい言葉が必要だと思いますか?

【いとう】そう思う。でも、ないんだね。

【重松】じゃあ、批評はいかがですか?

【いとう】批評も作品を乗っ取らないと本当の批評にはならないじゃない? それがツ
ツコミと批評の違いです。ツツコミは作品を補完するものとしてきれぎれに現れ、
批評は、結局は主体を伴って作品を乗っ取る。これがイヤ(笑)。

【重松】高藤緑雨の路線は? 毒舌批評家、短い言葉でひとを刺すってやつ。
いとうさんって悪口を書かないでしよう。批判の対象があるから書けるひとは多
い。本当は批判ができればラクなのかもしれない。いっそ嫌なやつになります
か?

【いとう】これがまたなれないんだ(笑)。蓮實重彦さんの僕に対する批評は、「厚
かましさが無い」だから。
【重松】そう。厚かましくない、意地悪じゃないんですよ。

【重松】それはいいよ、意地悪じゃないんですよ。

【いとう】ひとには意地悪だと思われてるけどさ(笑)。

【重松】じゃあ、脚注は?(笑)

【いとう】脚注ならいくらでも書けますよ、まさにツツコミだもん。あとは連句ですね。
連句って、要は、ずれた脚注でしよう。脚注が延々とつづく形式のなかで、イ
メージがずらされていくんです。中上(健次)さんがなぜ連句をやっていたの
かはよく考えます。やたらとうまかったしね。このあいだ宇多喜代子さんに会っ
たとき中上さんの話をしてくれたんだけど、『経聲』の連載では、一回一回に
たとき中上さんの話をしてくれたんだけど、『経聲』の連載では、一回一回に
うのが連載コンセプトだったと。となると、全体は連句になってる可能性もある。
宇多さんに「これは秋の花?」とかよく訊いてきたんだって。面白い話だよ。
中上さんも、やっぱり形式なんだよ。

【重松】考えてみれば『火の文学』でも扱っていたのは、山本健吉と、森澄雄、
それから角川春樹か……。定型好きだったんですね。

【いとう】しかしそれを表立たないようにやっていた。なんだ、また俳句かという感じ
です。「連作ノート」にも「切れ字の戦略性」と書かれていたので、ずいぶ
んが切れ字について読んでたけど、ちゃんと説明しているものはなかった。中上さ
んが切れ字についてなにを考えていたのか、本当は知りたいんだけどね。ち
なみに宇多(喜代子)さんに「切れ字ってなに?」って聞いたら、「諦め」と
の答えでした。

【重松】それでいえば、みうらじゅんさんとは連句でできるんじゃないですか?

【いとう】そうかも(笑)。

【重松】みうらさんが安齋肇さんとやっている「勝手に観光協会」って、『奥の細
道』でしょう。行って、その日のうちに曲を作って歌うんだから。あのひと、あ
っという間に芭蕉になれるよ。

【いとう】面白いね、それ。みうらさん、気がつかないふりしてるけど、意外と文学
少年だったらしいし。

【重松】彼は「親孝行プレイ」といったりして、すべてを「ごっこ」にできるひと
ですよ。でも僕からみれば、80年代のいとうさんこそ、「ごっこ」というテ
ーゼがずっとあったと思います。それも91年で終わっちゃうんだけど。

【いとう】遊んでられねえ、と。というより、遊ぶ場が世界になくなった、取られちゃ
ったわけです。それなのに、どうやら世の中はまだ戯れているようだ、この違和
感はなんなんだ、って。

【重松】ただ、しゃべってる場合じゃないという、いとうさんの世界に対する誠実さ
の一方で、すごく凡俗に言えば、黙ってる場合じゃないという誠実さもあるでし
ょう。

【いとう】それはいつも、すごく感じます。

【重松】「ワールズ・エンド・ガーデン」は、たしかに湾岸戦争を予見していたと
言われたけれど、あれはむしろオウムですよ。あの時期もいとうさんは沈黙
してた。

【いとう】「ワールズ・エンド・ガーデン」を書いたら、オウムが台頭してきたとい
うのも、自分にとっては、現実が虚構に取って代わられた感覚でした。虚構が
虚構ではいられず、現実に入らされてしまう。まるで「ノーライフキング」の
主人公になったようで、それもショックでした。それと、基本的に宗教が反社
会的であることは当然だろうと思ってましたから。

【重松】そこから、現実ごときに真似のできない虚構を作るのは?

【いとう】よくわかります。極北の虚構を書きたいとは思ってました。なまじ現実
に触れてしまうくらいなら、僕がそんな中途半端なものを書く必要はないって。
ルーセルの「作品にはなにひとつ現実世界を反映させてはならない」って異
常な文学観が僕にはひどく親しい。

【重松】じゃあ、逆に現実に虚構を侵入させていくことは?

【いとう】ノンフィクションのなかにフィクションを取り込むことには価値がありますよ
ね。ステイヴ・エリクソンの「リープ・イヤー」は僕にとってフィクション論の
最高到達点であり、小説の最高傑作なんだけど、大統領選のノンフィクション
のなかに、黒人奴隷サリーのフィクションをほんの1%、まぎれ込ませるわけ
です。99%の事実や彼の政治的な意見のなかに、1%の虚構が入ること、
大統領選がまったく別ものに見える。

割りを食べたの、いとうせいこうひとりだもん(重松)

【重松】いとうさんはずっと代弁者であることを求められ、でも代弁者はいけないと
いうスタンスでやってきたわけですが、湾岸戦争以降 15 年間も黙ってきた人
間は、誰をも代弁してない、しかしなにかの代弁ではあるんです。——僕が
編集者なら、そういうアプローチを提案しますね。

【いとう】いやいや、決して黙ってたわけじゃないんですよ。間かれば誠心誠意
答えてきた。ただ目立たなかっただけです。それは代弁者であることを避けて
きたからかもしれませんけど。

【重松】岡崎京子さんと作られた「ハブニングみたい」には、いつも最終回だけ
があったでしょう。予言もなく、どこにもリンクしてない、ただの終わり。宮台
真司さんが「終わらぬ日常」というなら、「日常なき終わり」があってもいい。
世界の終わりの風景だけを延々と書き続ける、そういう去勢訓練があってもい
いんじゃないでしょうか。

【いとう】それ、できるのかな、僕に(笑)。

【重松】やってもらわなきゃ(笑)。

【重松】いまま小説なのかという疑問。じゃあ代わりになにかあるのかという疑問。
——本当にビビッドな言葉がどこにあるのか、それはかり考えてるんだよね。

【重松】やっぱりそこに形式は必要ですか? ジャンルじゃなく?

【いとう】ジャンルじゃない。

【重松】だったら、いとうさんなら形式は作れるでしょう。ページをめくるという形式
をなくしてもいいかもしれない。

【いとう】本というメディアの意味から考えてるから、自家中毒気味なんです。ソ
シユール、デュシャン、レーモン・ルーセルという沈黙と言葉を扱った人たちの
ことを考えているうちに、自分も結局何もわからなくなって言葉それ自身につ
いては沈黙してしまっただけ——あとはもう、せせとデュシャンの本を翻訳してらだ
だけ。赤間啓之さんか当時、「そこ、触ると危険ですよ」って言ってくれてたん
だけど、結果的にそうなってます(笑)。

【重松】いとうさんにとっていまの状態は、心地好いもの? それとも抜け出すべき
もの?

【いとう】抜け出さなきゃ、と焦りを抱えてきて、今年になって逆に積極的に書か
ないでみようと思ったら、ふとラクになりました。

【重松】もしそこにもう一回焦りが生まれるとしたら?

【いとう】僕が好きになれないタイプの小説家だけが世界を席捲すると、アマノジャ
クな気持ちはふつふつとわくでしょうね。

【重松】あるいはみうらじゅんとコンビの解散(笑)。

【いとう】そうだね(笑)。

【重松】あるいは、えのきといちろうさんがやっていたような、ライブのライティング
をやってみるとか? 30分以内に5枚書いて、即売会。

【いとう】それはわりといいね。普通のメディアじゃないし。

【重松】武道館で書くとか。

【いとう】まあ、たしかにそれはアドリブです。例えば西鶴は俳諧でライブして
たわけだから、そういう書き方があり得ないわけではない。

【重松】雑誌とか、連載という「場」が、80年代はおそらくそれ自体で面白か
った。でもいまのいとうさんは、そこに面白さを感じられない。でも、僕は、わ
がままなリクエストが許されるなら、いとうさんが、文学も含めたこの時代をどう
見ているのかを、やっぱり知りたいし、読みたいんです。

【重松】結局、今日にはわか編集者の打ち合わせみたいなことはかり申し上げて
まいましたが、そんないとうさんが、今度編集者になったんですよ?

【いとう】毎日新聞社から不定期刊行で出る「PLANTED」。テーマは花です。
やばいでしょ、花にいつてる(笑)。

【重松】編集長として編集にかなりコミットするんですか?

【いとう】1号目はみんなに好きなことやれと言って、上がってきたものを見たん
ですが、2号目からは修正を入れつつ。

【重松】三浦雅士さんが「ダンスマガジン」の編集をやったように、いとうさんが
植物・花・園芸に行く?!

【いとう】趣味にいくってことがなかったから、自分にとっては新しいことなんですよ。

趣味なら自分を少し出してもよからう、と。

【いとう】それにしても、この対談、重松さんに精神分析を受けている状態ですね。

【重松】すみません。でも、僕の今日の暑苦しさは、バイパスしちゃった人間の負
い目でもあるんですよ。

【いとう】バイパス?

【重松】いとうさんが向き合ってる壁を、横から抜けちゃった。もししたら、いとう
さんが自我の言葉でやってきた80年代と90年代あたたまを、僕はずっとアン
カーとゴーストライターで過ごしてきたのかもしれないな、と。自我、ないです
から(笑)。ただそのとき、社会の自我というのか、社会の求めるものがあると
は知った。でもそれは逆に、僕が「40代のお父さん」として発言してきた
立場を、今度はいとうさんがバイパスして……。

【いとう】だからせんせんかみ合わないんだ(笑)。

【重松】自分を責めるようなことを言っても仕方ないけど、89年の宮崎事件では
大塚英志さんと中森明夫さんに背負ってもらい、91年の湾岸戦争ではいとう
さんに背負ってもらい、オウムや酒鬼薔薇事件では宮台真司さんに背負っても
らって、のうとうと生き延びている「マスのひとり」としての自分を感ずる。

【いとう】ええ? こっちが負い目ですよ。

【重松】負い目があるから、いとうさんが現状を突破する方法があるならいくらでも
考えたいわけ。だから、湾岸戦争以降の失語症状態を批判するしかないって。
あそこを割り食べたの、いとうせいこう、ひとりだもん(笑)。

【いとう】僕が割り食べたのかどうかはわからないけど、藤井貞和さんの孤独な戦
いも参照しないといけないと思う。藤井さんは素敵だった。湾岸は日本で唯一
の国外問題だったから、世界に侵入され、一瞬にして鎖国が解かれたような
気がしたんですよ。でも、そのあと、急激な再鎖国化が起きた。あらゆる
国外問題が、国内問題としてしか扱えない時代の到来ですから。

【重松】それに関して「マルチチュード」への志向性はありますか?

【いとう】期待はしてません。ネグリの的になればそりゃ理想的だけど、やっぱりもはや、
共産党入党か市民運動しかないのかも。

【重松】でも、それも思いとどまってる。

【いとう】だって、本当には考えかたが違うからね(笑)。装置としては面白いけど、
結局は利用することになる。ただ、代議制の中で世界に関与する方法が、
それ以外ないのが実に困る。

【重松】宗教には?

【いとう】「見仏記」のシリーズで仏教を嘗めたことで、宗教は回避しました。
【重松】しかもみうらじゅんという弾よけもいて(笑)。

【いとう】大きいですね、みうらさんのストイックな個人主義は。

【重松】だったらやっぱり言語活動だということになるけど、いまは、2006年のい
まだ書かれざる新作に対して91年が長く侵食している状態だから、逆に、
2006年から1991年を……。

【いとう】逆侵食しちゃえ、と。

【重松】うん。91年を2006年が侵食しちゃ。それが結果的に、この15年間
の日本の言説空間のひすみを頭わにするはずなので、なんとしても、いとうさ
んには1991年の超克してもらいたい。そのためには当時の自分を蹂躪す
るしかないなら、自分自身を攻撃してくださいとまで言ってしまおう(笑)。

【いとう】自分を攻撃するのは好きなんだよ(笑)。

【重松】まさに「しばく」。自縛自縛の自縛であり、自爆テロの自爆。

【いとう】なるほどね。

【重松】91年論のスタートですよ、いとうさん!

なぜ「91年」なのか?
対談前半は、配布中の
「WB」VOL.06で!

いとうせいこう Ito Seiko
63年生れ。編集者・ラッパー・作詞家・演出家・TVタレント・役者……。活動の幅広さそのものであるようなクリエイターでありつつ、書くことについては、誠実なところからゆえに言葉も失ってしまっている。80~90年代の代表作に、『ノーライフキング』『去勢訓練ほくか』

重松清 ○ Shigematsu Kiyoshi
63年生。『レタム』『直木』をはじめ、泣かせたり勇気づけたり、様々な作風が魅力の小説家。「早稲田文学」の学生スタッフおよびアシスタックだった通称あり。